

Reading Ban'ya Natsuishi's Haiku Collection “Kamigami no Fuga”(The Fugue of Gods)

夏石番矢句集『神々のフーガ』を読む



夏石番矢句集『神々のフーガ』、弘栄堂書店、東京、1990年6月1日、ISBN: 4-906239-03-X C3070 P2800E

Ban'ya Natsuishi, Haiku Collection “Kamigami no Fuga”(The Fugue of Gods), Koeido-shoten, Tokyo, Japan, June 1990, ISBN: 4-906239-03-X C3070 P2800E

Rei HATANO

羽田野 令

1990年6月に夏石番矢氏は、彼の四番目と五番目に当たる二冊の句集を中三日の日をおいて上梓された。『神々のフーガ』（弘栄堂書店）と『人体オペラ』（書肆山田）である。『人体オペラ』あとがきによると、第四句集は、<「日本」という幻想を突き破ろうと歴史軸をさかのぼった集>であり、第五句集は、<「人間」という幻想を突き破るため>の集であるということだ。一冊の中の章立てとして分けるのではなく、テーマ別に纏めるという氏の以前からの方法によって編まれた『神々のフーガ』について書いてみたい。

『神々のフーガ』は、記紀をはじめとした神話や伝説、朝鮮半島に残されている『三国史記』『三国遺事』などの世界を舞台に、七つの章から構成されている。

1 はじまり

神の一撃はインフレーションの渦だ
夢に見よ身長十億光年の影姫

たいそようめい
太素杳冥、原初を太安萬侶は古事記の序にこう記した。誰も知らない世界のはじまりを、洋の東西を問わず人は昔から想像してきた。杳冥とは、ギリシャで呼ばれたカオス、混沌と似ている。<地はかたちなく、くらやみがふちの面にあった>という創世記の言葉を引いて、レーチェル・カーソンの書いた(『われらをめぐる海』)海の起源を思う。太陽からもぎ取られた火の玉が地球になり、地球が冷えてゆく過程で片側から月が生まれた時のこと、そんな遙か彼方の時間を夢想せよと物語の始まりが告げられる。一九二九年に宇宙のインフレーション(膨張)が言われ、今では定説になっているそうであるが、その宇宙誕生を詠む一句から『神々のフーガ』は始まっている。二句目の「影姫」は、

日本書紀に影媛^{ひめ}の名の登場する悲しい歌もあるが、影が時空を越えて長く伸びているお姫さまという想像そのものが、このフーガの入口に相応しい。

月は日を我は汝を追う風の国
日本海に稲妻の尾が入れられる

我が汝を追う図が、天球の日と月の運行に比せられ、稲妻は、地上のあらゆる生命を産んだ女性性を持つ海へ、それも大陸と日本とに囲まれた日本海へ入れられるという。エロスが、空や海や天体という大きさの中に詠まれている。かつて夏石氏は、『Series 俳句世界 8 旅のトポロジー』（雄山閣出版、1998年）の鎌田東二氏との対談で、「芭蕉には日本海という異界がありますね」「暑き日を海に入れたり最上川<荒海や佐渡によこたふ天河>とか、ここでのすごい宇宙的な詩、俳句を書いていますね」と発言されている。それはこの二句目の句より後年のことではあるが、この句を作られた時にもその思いはあったのであろう。

月光を堪え忍ぶ山ここへ来い

動詞の命令形で終わる強いかたちの十七音に、美しさが限りなく籠められている。山とは古来より、柳田国男や折口信夫の言うような異境であり、神霊の降りてくる聖なるトポスであった。精霊が棲み、海同様ものの始源の深さを湛える場所であり、それゆえ恐れの対象でもあった。降る月光のもとに黒々と姿を現している山の姿に、古人が抱いたと同じような思いを持ったのであろうか。「ここへ来い」と、諸々を含んだ山そのものと呼んでいる。

2 東アジアの神々

第二番目の章「海はまほろば」からは神々の名前がたくさん出てきて、よほど上古に精通していなければ解らない固有名詞も多いのだが、後に用語解説が付され概要はわかるようになっている。用語解説があることもこの句集の特徴であろう。神話や説話を正確に知らなければ読めないわけではないが、知っていると楽しめる。また、この用語解説からは、記紀編纂者の政治的意図をふり落として、残る事実を見ようとしていることも書かれ、記紀の意図の中に納まらない上代世界の捉え方が貫かれた句集であることが確認できる。

我は海の子 速日へ速贄たてまつる

「われは海の子」という唱歌と同じフレーズを上置いて、太陽に供え物をして讃える句となっている。「速」は、勢いのさかんなことを表す美称。

三番目の章「闇の覇権」、四番目の「反復横跳び」は、朝鮮半島が登場する。日本を大陸との一続きの文化圏として考えているゆえの構成である。五番目の題は「土蜘蛛の Rond」。土蜘蛛とは、征服者に従わなかったその地の民のことである。風土記にいくつもの伝承が残されているが、その一つに土蜘蛛が圧殺された時に流した血から血田という名が付けられた地名起源譚がある。血田の入っている句も一句ある。

沈黙が日の神の戸を押し開く
イザナミの流し目強き日必ず雪降る
大国主の山の青葉は液体だ
たたずめば稲が鳴るなり夜見の国
百合若の鷹は倭国を讞と見る

天照大神の隠れた岩戸は歌舞音曲で開いたが、ここでは沈黙で開かれる。雪の空の向うを思うイザナミの眼。したたる青葉の中に据えられるのは、出雲系の神である大国主。冥界にはシュールに稲穂の音が鳴る。策謀によって島に残された百合若を助けた鷹、緑丸を祀るお堂は各地に残っているが、その鷹にとっての国を言うことで、国に対するひとつの見方を挙げている。これらには自由な想像が横溢しているが、それは句集全体にわたって言えることである。古典を材料とする時、それを自己のコンテクストに如何に取り込むかが問われるところであろうが、その点は、原典

のなぞりではなく読者を十分に楽しませてくれるものがある。

また、書き残されている物語の中を縦横に駆け巡り、その中に仮構の自己を存在させることによって、登場する神を写実したりストーリーを再現したりして臨場感が添えられる。諸処に折り込まれた神々の姿は、自らの作り出すものと重層的に世界を構築する要素となっている。

餅肌のこのはなさくやひめ no return

ふりむけは正勝まさかつあ吾勝かつかち勝速日はやひ

磐長いけながの股長ももながの姫流されき

蛾を肩に波の穂を踏み来る男

一句目から三句目の句は神の名前が詠まれている句。四句目は、海から渡って来て大国主と共に国を作った小さな神すくなびこな少名毘古那の姿である。

脱解王の波また波のモノローグ

瑠璃王の東西南北みずけむり

首露王を照らす北斗は枢なり

加羅の南は 雲も勾玉 島も勾玉

朝鮮半島の固有名詞が出てくる句を挙げてみた。私はこれらの王を知らない。まずは書かれた漢字から受けるイメージのままに読むが、加羅、新羅などという地名からイメージは広がる。知らない王の名を新しい名として読むことも可能だ。そのように読んでも面白いのではないかと思うが、朝鮮半島の王たちも調べるとそれぞれに色々なストーリーがある。新羅の脱解王は海から駕洛国(伽耶、加羅)へ来て、首露王に戦線布告、どちらもが鳥に変身して戦ったが、脱解王は結局首露王に追い払われた。そしてそのことは、新羅の伝承では出てこないそうである。瑠璃王という宝石の名の王は高句麗の王で、王位にある時領土拡大を実現させたが、後半生は不幸だったそうである。最愛の王子は水死し、その屍は探すも見つからなかったそうである。

3 ヤマトタケルと神武

六番目の「西風の翼」は、ヤマトタケルの話からの作品が多い。解説には、景行天皇の皇子とばかり限らないこと、他の人物もヤマトタケルに投影されているとされている。

荒海やに敷く八重えだたみ 豊いざさらば

虹の剣を見つめつつ思邦歌くにしのびうた

西風よわが足は三重に曲がれり

弟橘比売の入水のこと、ヤマトタケルが詠んだとされる歌のこと、三重の地名の由来となった「三重のまがりなし」と言われたり」と言ったエピソードがそれぞれ詠まれている。

七番目の「熊と烏」は熊野と八咫烏の章。

光の国の傘下の波の国を撃て

朝日に最も近い傷口ばけらった

「波の国」とは、海に囲まれた日本のことだろうか。「傘下」という言葉が気になるとそう思う。「朝日に最も近い」のは、日出づる国のことなのか。多くの傷口に膿をかかえている今の日本を重ね合わせるとその様にも思う。一方そ

うという読み方ではなく、「光の国」は天津国、天照の系統で、「波の国」は海人系と、古代の国を思えばよいのかとも思う。「ばけらった」と、おどけて揶揄している感覚のままに受け取った方がいいのかもしれない。読みも多様である。

犬山椒の実はまだ熟さずイワレヒコ

長髓彦に阻まれたため熊野から大和へ入った、神倭伊波毘古とは神武のことである。この最後の章は、戦前の国家の起点と考えられていた神武に帰結しているのだが、ここではその実体は朦朧としたものであることを訴えている。本物の山椒ではない犬山椒がまだ熟していないという表現は、強い支配者像には似合わないものである。

たしかにあれは熊の吐息の催眠術
ふつつつと陰なし桜揺らぐかな

神と同じ語源を持つ熊という語、その熊の吐く息によって見える幻だと「あれ」が語られる。〈国家の本質は共同幻想であり、どんな物的構成体でもない〉(『共同幻想論』)と吉本隆明は言うが、熊の口から出る虚像の中にそれぞれが見るまぼろしを、共同なる輪郭として感知することは難しいと、これらの句は言っているようだ。陰がないというおぼつかさは、桜の美を讃えるよりもその揺らぎを見る。

そのような国や権力の儚さを強調する作品の中に、

烏鳴く一点突破全面天国

の一句があり、思わず笑ってしまう。かつての全共闘運動のスローガンをもじって「天国」としている。このような既成語句を引用してのユーモアは全体を通して随所にあり、硬軟自在であることが窺える。以下はその例。

ちはやぶる一姫二太郎三胡瓜
張れときどき豚の昇天倭国の都
かざはや
風速の故郷に小錦を飾る
海はまほろは親神子神孫神きのう永眠す

最終章の最後二句は、

君はもともと神奈備山の松の塵
青虫の天下に鈴は響くなり

と、幻影さえも元は塵に過ぎないという無常観に達し、呪力ある鈴の音が響くのは、立派な確固とした国家にではなくて、青虫の治める世であるとあっけらかんとしている。

4 水平的展開

『神々のフーガ』のあとがきには、

この第四句集『神々のフーガ』は、水平原理をより包括的なかたちで体現しようと試みて成立した書物である。箱庭的でない水平原理からは、太初から現代にいたるまでのさまざまなドラマが紡ぎ出せそうに思えた。そのうえで「日本」という幻想が止揚できるのではないかと考えた。

とある。この地にあった国というものについて書かれた最初のもは、『魏志倭人伝』であるが、国はそれよりずっと以前からあったはずなのであろう。口承による伝達のみを言葉を通して出来上がっていった国という共同幻想。書かれた言葉に慣れ過ぎている私たちは、発した途端に消えていくという言葉本来の性質を普段は忘れていて、伝達手段がそういうものだけである社会は実際描きにくい。しかし、古事記以前に横たわっているその長大な時間を思うと

目眩にも似た感覚を覚える。それらの堆積の結果による記述である記紀の時間を、現在の我々が持っている国家幻想を基準に、そこから帰納して社会の原初を考えるとということを箱庭的言っているのであろう。箱庭から出て、水平に臨む地平に見えるものが、ここでは地理的連鎖の中で捉えられているが、箱庭を脱することは、自ずと自らの思考を縛るものを解くことでもあろう。新しい地平に立てば、天の神や海の神や出雲の神といった神々そのものが少し明らかに見えてくるのかもしれない。

太古のこの国に、大陸に、語り継がれた神話へと広がる想念を軸として創り出された言葉の世界は、私を遙かな世界へといざなってくれた。この句集を通して、夏石氏にとっての古代に少し触れることができたと思っている。

(初出、「吟遊」第31号、2006年7月20日、吟遊社)